

参勤交代の人足請負

西羽 晃

江戸時代の大名は原則として、参勤交代で江戸と国元とを1年ごとに往復した。その際の荷物などを運ぶ人足を雇うことになる。宿場で交渉して雇い入れるのも煩雑であるので、全行程を通す「通人足」を雇うことになる。江戸時代も後半には、通人足の調達やら参勤交代に伴う雑務は専門の業者に請け負わせるようになった。所謂民間委託である。人宿商人と言われる業者が江戸に居り、各藩の委託を請けていた。その中の米屋田中久右衛門家が松平越中守家の運送を請け負った。

江戸から桑名までの人足は江戸で調達できるが、逆に桑名からの場合は江戸の業者では不便である。そのため桑名からの場合は桑名地元の業者と共同請負であった。桑名の業者は米屋川瀬覚左衛門である。

安政6(1859)年6月11日、桑名藩主松平猷は桑名から三里の渡しを経て同日は熱田泊りで、それから東海道を進んだ。全部で11泊12日間の旅であった。予定よりも1日余分にかかったが、これは大井川の川止めにあつたためである。この参府道中の通人足を請け負ったのが、上記の江戸の米屋田中家と桑名の米屋川瀬家である。通人足は合計で179人であり、そのうち藩主の駕籠担ぎ(交代要員も含む)10人、家老吉村外記の駕籠担ぎ(交代要員も含む)6人であった。また大名行列は戦陣に赴く体制を執り、江戸時代の初期には米・味噌・漬物(石を乗せた樽のまま)などの食料品や風呂桶も持参したと言われるが、幕末でも鋏箱持、鳥毛槍持、具足持、床几菅笠持、鞍覆箱持、夜具長持、台所諸式持、雨具持など、多数の人足が必要とされた。

桑名で400両の前金を受取り、途中でも金銭を受取り、最後の決算では合計約773両受取り、支出合計は約419両であった。差引約354両の利益を上げたわけである。実に45%余の利益率である。それも殆どが前金で受け取っているため、初期投資はほぼゼロという甘い仕事であった。桑名藩としては大きな支出であるが、民間委託の方が金銭的に安く、また専門業者であるので安心して任せられたのであろう。田中家と川瀬家が利益を折半しているため、川瀬家では約177両の実収入である。

桑名の七里の渡し場跡にある常夜燈には寄進者の名前が刻まれており、その刻字は風化して非常に見えにくくなっている。『歴史の道調査報告書VI(東海道)』(三重県教育委員会 1987年)に翻字が掲載されており、その中に米屋久右衛門、川瀬覚左衛門の名も見える。米屋久右衛門は何処にでもありそうな名前なので、この米屋久右衛門が江戸の米屋田中久右衛門かは不詳である。



七里の渡し場跡にある常夜燈